

# インド西部の伝統的職業とジャジマーニー関係 ——調査村の事例を中心として——

篠田 隆

## Traditional Occupation and Jajmani Relationships in West India with Special Reference to Survey Villages in the Ahmedabad District.

Takashi Shinoda

はじめに

I：調査地域のカースト構成（過去と現在）

II：調査対象村落のカーストと職業

むすびにかえて

はじめに

本稿は2つの目的をもっている。第1は、調査村およびその隣村の事例に主に依拠しながら、そこにみられる諸カースト<sup>註1</sup>とりわけ職人・サーヴィスカーストの現時点での存在形態を明らかにすることである。伝統的職業と実際の生業との関連、所得に占める伝統的職業の比重、労働の質と量、所得の入手形態（現金、現物の比重）、労働その他の慣行、が主要な関心対象である。

第2は、職人・サーヴィスカーストの動向を、近年の社会、経済条件の変化との関連で捉えることにある。これら諸カーストの家族史にも注目し、所得の入手形態と慣行の変化を可能な限り跡づける。政府の諸政策、市場メカニズム、交通・運輸、技術上の変化が職人・サーヴィスカーストの動向を大きく規定する要因であり、社会意識や消費者意識もそれらに伴い変化してきているとおもわれる。

これまでに、社会学者や人類学者によるカーストに関する数多くの農村調査がある。また、その他どんな類の農村調査であれ、カーストと職業の情報は外せないで、これら全てを合わせると、カーストに関しては既に膨大な情報と研究蓄積がある<sup>註2</sup>。しかし、これらの情報と研究蓄積が、職人・サーヴィスカーストの存在形態を明らかにする上で、どの程度役に立つかといえは、はなはだこころもとない。なぜなら、カースト研究の主眼は、1930年代以前においては、カースト起源論やインド学（インドロジー）の一環として、それ以降は階層（ハイラーヒー）、儀礼、カースト規制に置かれ、経済調査の場合でも、土地所有者、農耕民、労働者が主体であって、職人・サーヴィスカーストは副次的な関心対象であったためとおもわれる。むろんジャジマーニー関係<sup>註3</sup>の調査では、職人・サーヴィスカーストは主体となるが、その場合でも、横断的な分析はともかく、歴史的な動向把

～II, Indian Council of Social Science Research, New Delhi, 1969, 1972 および A Survey of Research in Anthropology, ICSSR, New Delhi, 1975. に詳しい。

- 3 : インドの村落には通常、10-20種のジャーティが存在し、彼ら間で一定の分業が行なわれている。すなわち、農耕カーストのほかに、鍛冶工、大工、壺屋、床屋、司祭、牛飼、労働者などのジャーティがあり、これら職人・サーヴィスカーストは農耕カーストに対して財やサーヴィスを提供し、その対価として、農耕カーストは穀物（あるいは現金）を支給する分業関係が成立している。むしろ職人・サーヴィスカースト間でも財やサーヴィスの交換はあるのだが、これは副次的な関係に過ぎず、主要なのは、農耕カーストと職人・サーヴィスカースト間の分業である。

この分業に関して、これまでに2種類の学説が提示されている。深沢宏氏の整理によると、第1の学説は、19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、カール・マルクス、B. H. ベーデン・パウエル、マックス・ウェーバーらが表明した学説で、そこでは、村落の職人・サーヴィスカーストは明示的に「村落団体の」傭人であるとみなされ、かつこれが世襲制であったと明言されるか、あるいは示唆されている。第2の学説は、20世紀の30年代以降、特に社会人類学者によって提示された学説で、職人・サーヴィスカーストは、村落内の個々の農民（ないし地主）家族によって、個別的・世襲的に雇傭された「家族の傭人」であるとみなされている。この雇傭、被雇傭者の関係は、北部インドの農村調査でこれを初めて明らかにした W. H. ワイザーの用語法に従い、ジャジマーニー関係と呼ばれ、今やインド農村研究上の重要概念として広く受け入れられている。

また、村抱えかジャジマーニーかの2範疇の他に、独立の小商品生産者としての形態が考えられる。これら3範疇の相互関連を地域的また時系列的に明らかにすることが、当面の研究課題として重要であろう。

- 4 : The Cambridge Economic History of India の中で職人・サーヴィスカーストの問題をとり上げることのできなかつた理由として、編者 Dharma Kumar は、当該分野の研究の遅れをあげている。

Dharma Kumar(ed), The Cambridge Economic History of India, Vol. II c. 1757-c. 1970, Delhi, 1982, xviii.

#### I. 調査地域のカースト構成（過去と現在）

本節では、調査対象地域のカースト構成を概観し、重要なカーストについて説明を加える。この作業は、調査対象村落のカースト構成上のありうべき特殊性を相対化するとともに、地域人口の職業構成について一定の手掛りを与える。

まず第1図に、調査対象地域および対象村落を示す地図を掲げる。

ジャジマーニーという概念用語の創始者 W. H. ワイザーの北インドの調査村には、1932年時点

第 I - 1 表：アーメダバード県のカースト構成 (1872年)

(百人)

カースト	伝統的 職 業	人口	カースト	伝統的 職 業	人口	カースト	伝統的 職 業	人口
Brahman	司祭	471	Luhar	鍛冶工	97	Bhavcha	農勞	7
Meshri	商人	316	Kumbhar	陶工	198	Odia	採掘人	10
Shravak	商人	293	Darji	裁縫人	67	Purabia	使者	2
Kanbi	農耕	1,237	Bhat	詩人 系図づくり	52	Kalal	酒製造人	1
Rajput	農耕	497	Valand	床屋	120	Lodha	運搬人	3
Sathvarah	農耕	69	Dhobhi	洗濯人	10	Marvadis	(マルワール人)	35
Kachhia	農耕	32	Bharvad	牧夫	174	Bajania	アクロバット	16
Koli	農耕	2,080	Rabari	牧夫	108	Bhil	(部族民)	14
Khatri	織工	38	Ahir	牧夫	7	Mochi	皮革工	55
Ganchi	搾油人	40	Bhoi	漁師	32	Khalpa	なめし工	124
Bhavsar	捺染工	54	Kharva	瓦職人	6	Garuda	不可触民 司祭	23
Chhipa	つや出し人	7	Gola	米つき人	17	Dhed	織工	393
Soni	金工	67	Maratha	(マラータ人)	11	Bhangia	掃除人	127
Suthar	大工	111	Vaghri	烏うち人	132	Sadhu	司祭	66
Kansara	錫細工師	12	Raval	運搬人	83	その他	—	137
Kadia	煉瓦置き	17	Kamalia	毛布製造人	2	計	—	7,470

注) 1872年のアーメダバード県人口は829,637人、内ヒンドゥ教徒747,027人の内訳のみを表に示す。ただし、ジャイナ教徒35,847人はヒンドゥ教徒に含められている。数値は拾の位を四捨五入して算出。なお、伝統的職業以外の基準で区分された項目は、括弧で示す。

出所) Campbell, J. M., Gazetteer of the Bombay Presidency, Vol. IV. Ahmedabad, Bombay, 1879.の31~40ページより集計。

育している。収入源は、凝乳、牛乳、羊毛などである。Bharvads と通婚はしないが、伴食はする。<sup>註14</sup>  
ヴィーラムガム郡に Bharvads と Rabaris は密に分布し、彼らが創設した村も多い。<sup>註15</sup> 調査対象村落の内のひとつも、Bharvads により創設された。旧地誌では、Bharvads は粗末な小屋に住み、羊と山羊の放牧に従事するのに対し、Rabaris は町や村の比較的りっぱな家屋に住み、雌水牛や雌牛、羊、山羊を所有していたとし、<sup>註16</sup> 両者の相違を強調している。

調査対象村落に関連する職人カーストは、金工、大工、鍛冶工、壺屋、裁縫師、皮革工などである。

金工は、中央グジャラート、サウラーシュトラ北部、カッチ地方の都市と大きな村落に分布している。金工は本来のカースト Sonis のほかに、Luhars (鍛冶工)、Suthars (大工)、Kansaras (真ちゅう細工師)、Mochis (皮革工) などの雑多な諸カーストからの参入者よりなっていた。彼らは、Luhars Sonis、Suthar Sonis などと呼ばれた。金工職は他の職人職よりも神聖かつ社会的地位が高く、蓄財のチャンスも大きいと考えられたので、多くの参入者をうんだ。Sonis は少数の例外を除き、<sup>註17</sup> 伝統的職業に固執している、と記されている。

大工は、ボンベイ管区のいたるところに見い出される。伝統的職業は、牛車、<sup>註18</sup> その他の農具の製作と修理で、報酬は収穫時に穀物の形態で村人より受けとっていた。グジャラート地方の一部では、穀物報酬の代わりに、免税地が村人により与えられた。都市居住の大工は、家屋、商店それに家具類を作製した。<sup>註18</sup>

職人カーストの内、金工、壺屋、大工、鍛冶工、裁縫師、レンガ工、皮革工の生活は概して良好であった。<sup>註19</sup> これらの内、壺屋、大工、鍛冶工、裁縫師は、農村に広く分散して居住していたとおもわれる。彼らの人口および村民の生産、消費生活における重要性から推して、最も一般的な村の職人層をなしていたであろう。

サービス・カーストで重要なのは、床屋であり、その人口から、ほとんどの村に存在していたことが推測できる。彼らは、整髪、髭そりの業務のほか、結婚式、出産また祭りの際に欠くべからざる役割をもっていた。<sup>註20</sup>

雑役カーストも各々伝統的職業をもっているのだが、むしろ農業労働の供給源として重要であった。雑役カーストのほかに、Kolīs などの耕作カーストの一部また職人・サービスカーストの一部が農業労働に従事していたとおもわれるが、実際の規模はわからない。

現在のカースト別人口については、指定カースト (Scheduled Castes) と指定部族 (Scheduled Tribes) <sup>註21</sup> を例外として、1931年国勢調査を最後に集計は行なわれておらず、以前の数値と比較できない。しかもカースト別の社会、経済調査は、一部の後進諸階級を除き実施されておらず、<sup>註22</sup> それ故大部分のカーストの説明にあたっては、いまだに独立前のカースト辞典類、国勢調査、地誌類が主要な出典となっている。かような状況を踏まえ、以前との変化が指摘されているカーストで、調査対象村落にかかわるもののみを以下に略記する。

まず農耕カーストについて。Rajput (Nadoda はその一肢) は Kanbis、Kolīs とともに、以前と

Village Community in Services, Lucknow, 1936.

2 : バルテー職人は、大工、鍛冶工、陶工、皮革工、縄屋、床屋、洗濯人、村書記、占星師、ヒンドゥー神殿の番人、金工、マハール (汚物処理人) の12種類である。

深沢宏、第9論文「18世紀デカンの村落における備人について」、『インド近世社会経済史研究』、東洋新報社、1975、308～309ページ。

3 : それら職人層の構成は以下の通り。榨油人、パーン屋、織工、花菜栽培人、毛布織工、綿あるいは毛梳き工、裁縫師、錫細工師、鑄物師、宝石工、香水製造人、真ちゅう細工師、ガラス細工師。

小谷汪之、「インド村落共同体の再検討—18世紀デカン地方の村落共同体における分業関係—」、『歴史学研究』第364号、4ページ。

4 : 郡のデータは、Papers Relating to the Revision Settlement of the Viramgam Taluka of the Ahmedabad District, Bombay, 1929, p.2 にみられる。(以下 Papers Relating... と略記)

5 : Campbell, J. M., Gazetteer of the Bombay Presidency, Vol. IV. Ahmedabad, Bombay, 1879, p.108.

6 : Enthoven, R. E., The Tribes and Castes of Bombay, Vol. III, Delhi, 1975, p.269.

7 : Ibid., p.271.

8 : Papers Relating..., op. cit., p.2

9 : Ibid. Thakarda Kolis はイギリス統治に対して執拗に反抗を繰り返したので、この一節には当時のイギリス人官僚の統治者としての偏見が表白されている。

10 : Enthoven, R. E., op. cit., Vol. III, p.55.

11 : Enthoven, R. E., op. cit., Vol. I, p.118.

12 : Ibid., p.122.

13 : Enthoven, R. E., op. cit., Vol. III, p.252.

14 : Ibid., p.253.

15 : Papers Relating..., op. cit., p.2.

16 : Campbell, J. M., op. cit., p. 186.

17 : Enthoven, R. E., op. cit., Vol. III, pp.344—348.

18 : Ibid., pp.355—356.

19 : Campbell, J. M., op. cit., p.190.

20 : Ibid., p.192.

21 : 指定カーストと指定部族については、

押川文子、「独立後インドの指定カースト・指定部族政策の展開」、『アジア経済』22—1、アジア経済研究所、1981年を参照のこと。

22 : 後進諸階級については、

が、調査村にブラーフマンは不在である。IIIは後進グループであり、不可触民よりなる。このグループが不浄と考えられている仕事、例えば、家畜の死体処理や道路の清掃を行なう。年雇、賃労働の供給源でもある。IとIIIに挟まれたIIが中間グループであり、主に職人・サーヴィスカーストよりなる。調査村では、牧夫カーストが優勢である。これは、主調査の目的が家畜経済にあり、牧夫カーストの比重の高い村を選択したためで、通常の村落では、牧夫カーストの比重は小さい。祭礼では、Ravibhan と Gosai の両カーストがブラーフマンを代替している。I～IIIのグループ間のカースト序列上の格差は、村人に明瞭に意識されているが、同グループ内、とくにIIの中間グループ内の序列は流動的である。第1表に示した序列は、カースト間の水、食物の授受関係、儀礼への出欠関係のデータに基づき、配別したものである。<sup>12</sup>

グループIから始めよう。調査村のドミナント・カーストは Nadoda である。同カースト成員からの情報では、Nadoda はこの一帯112カ村に分布しているという。この村の形成期に、彼らの祖先は開拓民として隣村より移住してきた。彼らは人口でも経済力でも圧倒的に優勢であり、歴代の村長は例外なく Nadoda 出身である。Nadoda の平均世帯員数は6.35人で、Nadoda を除く全カーストの平均世帯員数5.31人を1.04人上回る。世帯員数が10人以上の世帯は全村で11戸あり、内9戸は Nadoda に属す。Nadoda の場合、これら大家族は例外なく50ビガ(12ha)以上の経営地を持っている。大規模経営のために自家労働力を確保する必要があるが、これら大家族の形成を促しているとみてよいだろう。グループIに属す他の農耕カースト、Thakkar と Patel は近年村に入り、前者は商店を経営し、後者は小学校の教師をしており、農業経営には関与していない。

グループIIに移ろう。牧夫カーストの Bharvad の世帯数は Nadoda に次ぐ24世帯である。Bharvad は Nadoda が入植する以前から、村の貯水池カンカリ池の周辺に居住していた(村名カラカラワーリーは、カンカリ池に接尾辞ワーリーが結合してできあがった)。当初村に居住した Bharvad は、4家族であったとおもわれる。というのは、現在、村人の家畜の放牧権を輪番で享受しているのは、これら4家族の子孫に限定されているからである。Bharvad の平均世帯員数は、全村平均よりも0.91人少ない。しかも世帯員数の分布は、2～8人までである。牧夫カーストは農耕カーストと異なり、合同家族を形成する利点は小さい。所有家畜数の多寡にかかわらず、放牧は成年男子1～2名によりなされるからである。さらに、家畜は土地よりも容易に分割できることが、単婚小家族の比率を高める副次的要因となっている。

Prajapati 4世帯の内、伝統的職業である陶業を守っているのは1世帯のみで、他の3世帯は、土地経営あるいは建設業に従事している。Suthar の2世帯は兄弟であり、ともに伝統的職業である大工職に従事している。世帯員数が2.00人と少ないのは、息子夫婦は皆村外に出ているためである。Darji は近年村に入り、伝統的職業である裁縫を行なっている。Ravibhan と Gosai はともに伝統的職業である祭礼に従事している。Raval はラクダを2頭、役畜として所有し、伝統的職業である運搬業に従事している。2組の息子夫婦と合同家族を形成し、共働している。Valand は伝統的職業である床屋のほかに、若干の副業をもっている。Luhar は3世帯あるが、いずれも伝統的職業である鍛

第II-2表：職人・サーヴィスカースト別土地所有、土地経営世帯数の分布

(世帯数)

カースト (伝・職)		面積 (ピガ)						所有・ 経営世帯数	全世帯数
		10 未満	10   19	20   29	30   39	40   49	50 以上		
Bharvad (放牧)	所有	2	3	1	1	—	—	7	24
	経営	—	—	1	—	1	—	2	
Prajapati (陶工)	所有	1	2	1	—	—	—	4	4
	経営	—	1	1	—	—	1	3	
Vanker (織工)	所有	1	—	—	2	—	—	3	11
	経営	1	—	—	1	—	1	3	
Koli (農耕/農労)	所有	1	1	—	—	1	—	3	6
	経営	—	—	—	—	—	—	0	
Suthar (大工)	所有	—	2	—	—	—	—	2	2
	経営	—	—	—	—	—	—	0	
Luhar (鍛冶)	所有	1	1	—	—	—	—	2	3
	経営	—	1	—	—	—	—	1	
Raval (運搬人)	所有	1	—	—	—	—	—	1	1
	経営	1	—	—	—	—	—	1	
Senva (縄屋/ドラム)	所有	—	—	—	1	—	—	1	1
	経営	—	—	—	—	—	1	1	
Ravibhan (祭礼)	所有	—	—	—	1	—	—	1	1
	経営	—	—	—	—	—	—	0	
Gosai (祭礼)	所有	—	1	—	—	—	—	1	1
	経営	—	—	—	—	—	—	0	
計	所有	7	10	2	5	1	0	25	54
	経営	2	2	2	1	1	3	11	

注) 10ピガは約2.4haにあたる。

出所) 筆者の農村調査 (1985年3月：対象期間は1983年11月～84年10月)

地経営あるいは建設業に従事している。土地経営3世帯の内、雄牛1対と農具を所持しているのは1世帯のみであり、他は雄牛、農具の賃耕に負っている。

Vankerの土地所有3世帯は、いずれも土地経営を行っており、内2世帯は各々雄牛1対を所有している。他の1世帯は1984年に州政府より5ピガを安価で購入しており、経営は賃耕に依存している。この世帯では、土地経営は賃労、裁縫に次ぐ二次的所得源である。他の2世帯でも副次的所得源として賃労を行っており、専業としては成立していない。この2世帯の所有地63ピガは20世紀初頭には彼らの祖先により所有されていた。

第II-3表：カースト別主要所得源別世帯数の分布

(世帯数)

カースト	伝統的職業	土地経営	農業労働	農外労働	牧畜	建設	製造業	商業	サービス	地代/送金	計
Nadoda	農耕	35(12)	4(4)	1(1)	—	1(1)	—	2(1)	2(2)	9(5)	54(26)
Bharvad	放牧	2(2)	3(3)	—	19(14)	—	—	—	—	—	24(19)
Vanker	織工/雑役	2(2)	9(1)	—	—	—	—	—	—	—	11(3)
Koli	農耕/農労	—	5(2)	—	—	—	—	—	—	1(1)	6(3)
Prajapati	陶工	2(1)	—	—	—	1(1)	1(1)	—	—	—	4(3)
Luhar	鍛冶	1(1)	1	—	—	—	—	—	1(1)	—	3(2)
Suthar	大工	—	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	2(2)
Thakkar	農耕	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
Patel	農耕	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
Darji	裁縫	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
Ravibhan	祭礼	—	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	1(1)
Gosai	祭礼	—	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	1(1)
Raval	運搬	—	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	1(1)
Valand	床屋	—	1(1)	—	—	—	—	—	—	—	1(1)
Vaghri	鳥うち/農労	—	1(1)	—	—	—	—	—	—	—	1(1)
Senva	縄屋/ドラム	1(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	1(1)
計	—	44(19)	24(12)	1(1)	19(14)	2(2)	1(1)	3(1)	10(8)	10(6)	113(64)

注) 括弧内の数値は、世帯数に占める副次的所得源をもつ世帯数である。

出所) 筆者の農村調査 (1985年3月: 対象期間は1983年11月~84年10月)

の所得源をもっている。さらに、同表の農外労働の項目に繰り入れていないが、農閑期に州政府の組織する土木工事(貯水池建設)に約250人が延1万労働日従事しており、農外労働は低所得世帯の重要な所得源となっている。かように、世帯を単位とすると、複数の所得源をもつのは常態といえる。伝統的職業を継承する職人・サービスカースト世帯も例外ではなく、伝統的職業のみで生計をたてているのは裁縫師の世帯のみである。また Bharvad や Prajapati については、伝統的職業の継承をめぐる、親族間で調整の行なわれている様子が、同表から観察される。伝統的職業を継承する世帯と土地経営を一次所得源とする世帯との、いわば親族間での分業がみられる。

次に、世帯の複数の所得源が家族成員間のどのような分業を通して実現されているのかを検討しよう。このために、カーストを単位とした年令別、性別の労働人口比率をみる。第4表を掲げる。同表での労働人口とは、家事、採草、採糞、監督労働以外の生産的な労働人口であり、労働日の多寡は問わない。なお、人口の少ない諸カーストは、others(その他)の項目に一括してある。

全体的な特徴の第1は、男女ともにカーストを問わず、労働へのタブーのみられないことにある。成人女子と老人男子の労働人口比率に経済格差に起因する若干の世帯間格差は認められるが、総じてカーストや階層にかかわらず、20~49歳の成人男女の労働人口比率は高い。



第II-5表：カースト別性別主要所得源別労働人口の分布

(人数)

カースト	土地経営		農業労働		農外労働		牧畜		建設		製造業		商業		サービス		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
Nadoda	75(3)	61(2)	13(2)	19(6)	1	—	—	—	2(1)	—	1	—	3(1)	1	6(1)	—	101(8)	81(8)
Bharvad	4	—	2	16(9)	—	1	24(1)	13	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	31(2)	30(9)
Vanker	4	4	10(5)	18(15)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	16(7)	22(15)
Koli	—	—	11(2)	11(4)	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11(2)	12(4)
Prajapati	3(1)	2	1	3(1)	—	—	—	—	1	—	1(1)	1(1)	—	—	—	—	6(2)	6(2)
Luhar	—	—	3(1)	5(3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	4(1)	5(3)
Suthar	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2	—
Thakkar	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—
Patel	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
Darji	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
Ravibhan	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	2(2)	—
Gosai	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	1
Raval	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	3	1
Valand	—	—	3(1)	1(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(1)	1	5(2)	2(1)
Vaghri	—	—	2(1)	2(1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(1)	2(1)
Senva	3(1)	1	—	2(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	5(3)	3(2)
計	89(5)	68(2)	46(12)	78(42)	1	2	24(1)	13	3(1)	—	2(1)	1(1)	4(1)	2	24(9)	1	193(30)	165(45)

注) 括弧内の数値は、労働人口に占める兼業者数である。  
出所) 筆者の農村調査 (1985年3月：対象期間は1983年11月～84年10月)

どは、自作地での労働である。

農外労働の人口は、州政府の土木工事での雇用を計算に入れていないために、過小にあらわれている。農業労働従事者の大半は、土木工事に参加している。

牧畜を主要な所得源とするのは、Bharvadのみである。男女間の分業は明確であり、男子は家畜の放牧、女子は飼料投与、搾乳、乳加工、その他の家畜産出物の収集と加工の仕事を行なう。Bharvadの男子は、ほぼ牧畜に専従しているのに対して、女子の半数は農業労働を主要所得源としている。世帯を単位とすると、副次的所得はほぼ女子によりもたらされている。

建設、製造業、商業の労働人口が少ないのは、調査村が当地域では人口規模が小さく、比較的后進的な農村に属することと対応している。伝統的職業で製造業に入るのは、陶業に従事する一老夫婦のみである。彼らは自作地の耕作も行なっている。

サービスの担い手は、ほぼ男性によって占められている。ヒンドゥ社会の浄・不浄観念の影響で、農村で女性の提供できるサービスは限定されている。さらに、技術、財産の継承は父系原理に基づくために、女子会員には継承されていない。女性で唯一のサービス提供者は床屋の妻で、小学校の給食係をしている。伝統的職業を維持するサービスカースト世帯の主要労働力、たとえば大工、裁縫師、運搬人、司祭それに放牧サービスの提供者(後述)などは、伝統的職業に専従している。

以上の検討により、職人・サービスカーストの世帯単位および労働人口単位での所得源別分布と兼業状況が明らかとなった。これまでは伝統的職業の継承如何にかかわりなく、職人・サービスカースト全般を取扱ってきたが、これ以降の分析は、伝統的職業を継承している職人・サーヴィ

しかし、年間定額であれ、現金での報酬形態は、職人を小商品生産者の立場に容易に置きかえるであろうから、現実的には現物での報酬形態が、ジャジマーニー関係の条件として機能している。この点で興味深いのは、農耕カーストからの報酬は土地経営の有無にかかわらず、現物での支払いが期待されている点である。このため調査村では、リース・アウトなどの理由により土地経営を放棄している農耕カースト世帯が職人からのサービスを受けた場合、報酬はしばしば購入された穀物によってなされている。

ただし、ジャジマーニー関係の顧客は、農耕カーストのみならず、雑役カーストおよび他の職人・サービスカーストを含み、これら農産物を生産しない階層からの報酬は現金の形態をとる。加えて、農民からの報酬も現物と名目的な額の現金とを組み合わせる慣行があり、伝統的職業の報酬の一部分は、現金形態をとっている。現物と現金組合わせの慣行は、調査村の場合、今世紀初頭まで逆のほることができる。

放牧カーストのジャジマーニー関係は、この地域独特のものであるとおもわれる。これは、以下の3点において、調査村内の他職種によるジャジマーニー関係とも大きく異なっている。

第1は、村民所有家畜の放牧権を享受するのは、この村の創設にかかわった Bharvad 4 家族の子孫に限定されており、年々輪番で放牧権が移転することである。この放牧権は、雌牛と雌水牛の2つに分かれている。輪番での放牧権の移動が可能なのは、現在も多くの Bharvad 世帯が伝統的職業の放牧に従事しているためである。第6表に入れた Bharvad 2 世帯は、たまたま調査対象期間に雌牛と雌水牛の放牧を受けもった世帯であり、他の職種と事情を異にしている。

第2の相違点は、他の職種ではサービス提供者と顧客の契約は任意であるのに対して、放牧の場合は強制となっていることである。前者の場合、何らかの理由でサービスを受ける必要がないと顧客が判断した時、彼はこのジャジマーニー関係から自由に離脱できる。何らペナルティは課されない。これに対して後者の場合、Bharvad との契約が義務づけられている。ただし、輪番の放牧者の放牧態度、能力に不満の世帯は、他の放牧者と個別に契約を締結できる。しかしその場合には、個別契約料のほかに、家畜を預けないにもかかわらず輪番の放牧者に対して、定められた量の穀物を支払わねばならない。かように、放牧者の立場が有利なのは、この村の創設に Bharvad が深くかかわり、かつ強力な勢力をなしてきたためだとおもわれる。

第3の特徴は、放牧のサービスは、家畜所有者のカーストにかかわらず、全ての雌牛、雌水牛を対象としていることである。床屋、司祭などと異なり、放牧サービスは不可触民に触れたり、接近する必要がないために、浄・不浄観に起因する規制が働かないためであろう。

所得とその内訳の検討を続けよう。Bharvad の場合、村民所有家畜の放牧による所得の、総所得に占める割合は概して大きくあらわれているが、輪番制故、放牧費所得は恒常的な所得源とはなっていない。

司祭の場合、寺院所有地からの地代を伝統的職業の経済基盤の一部と考えると、総所得に占めるこれらの比率は極めて高い。ただし Ravibhan と Gosai の間の経済基盤格差は大きく、副所得源を

きの仕事は、結婚式と祭りの際に限定されている。結婚式での報酬は婚家の社会的地位に応じ現金で受けるが、祭りについては誰からも報酬をもらわない。

次に、ジャジマーニー関係を保っている職人・サーヴィスカーストの報酬の支払い形態や慣行などの定性的側面に触れる。調査村の事例のみならず、必要に応じ隣村5村の事例にも触れる。このために第7表、調査対象村落のカースト構成、を掲げる。同表の数値は概数である。各村の人口(1981年)は500~2000人の範囲内にあり、当地では小・中規模の村落に属す。

まず、Suthar (大工) から。農村での大工職は、農具類の製造と修理が主要な仕事内容となっている。このほかに、戸や窓のとり付けの仕事も行なっている。これら製品の製造については、支払いは現金払いとなっている。農具の場合、農民が木材を持参し、大工はそれを加工、組み立てる。農具の種類によって、製造料は定まっており、依頼者は依頼の都度、規定料金を現金で支払う。村民からの聴きとりによると、この慣行は古く、今世紀の初頭まで逆のぼることができることである。大工が村人(耕作農民)とジャジマーニー関係にある仕事の内容は、農具の組立てと修理である。犁、軋、ドリル、ハローなどは消耗が激しいので、シーズン終了後、整備されねばならない。大工は、修理、組立てのサービスの対価として、各農民世帯より一定の穀物(小麦や雑穀)を受けとる。時期はカリフ(秋)作の収穫後(9~12月)で、報酬は、サービスの量に基づいてではなく、各農民家族の所有する雄牛数に応じて受けとる。1対の雄牛が基準となり、2対の場合は2倍、1頭(2分の1対)の場合は半量となる。もっとも、雄牛の対数と修理されるべき農具の本数は、おおまかに対応しているので、サービスの量と報酬は一応相関しているとみることができよう。通常、雄牛1対について、年間で小麦ならば37キログラムが支払われる。近年、市場町での農具の購入が一般化しており、大工の仕事内容も製造から修理に重点が移動している。

Thori Vadgas 村と Bhadana 村には大工カーストは不在であり、他村の大工がサーヴィスを行なっている。対照的なのが Vani 村で、大工カーストは伝統的職業を放棄しており、他のカースト、Nadoda と Kumbhar が大工職を補助的所得源としている。

床屋の主要な仕事は整髪と髭そりである。整髪の対象は通常男子のみであり、女子は対象とならない。髭そりは17~18歳以上の男子のみが対象となる。17歳の青年は、農村では一人前の労働力に数えられている。ジャジマーニー関係の顧客に対して床屋は、週1回の割合で髭そりを、月1回の割合で整髪を行なう。報酬は、顧客世帯から穀物で支払われる。報酬の基準は、髭面(dadhi)ひとつ当たり25kgの穀物であり、整髪を受ける子供数は全く考慮されない。子供数の多寡に応じて、サービス量と報酬間にアンバランスが生じそうであるが、仕事量に占める髭そりの比重が大きいので、実際には報酬はサービス量にほぼ対応しているといえよう。報酬はカリフ作の収穫後に受けとる。

現在の床屋は、25年前に隣県より調査村に招へいされた。先代の床屋が死亡し、後継者も絶えたために、床屋カーストを介して希望者が募られた。当時彼の出身村では3兄弟が床屋の仕事に従事しており、限られた需要のもとで過剰な競争をうみ出していた。調査村の人口規模が小さいので踏

ように規定されていないので、各世帯の経済状態に応じて支払われる。穀物は通常カリフ作の収穫後に支払われるが、このほかに年数回の大きな祭りの際に、寺院で寄付金の記帳が行なわれ、同額の現金あるいはそれに相当する農産物が後に支払われる。

シヴァ寺院の収入の内訳もラームジー寺院に類似している。相違点は、農耕カーストの支払い額が雄牛1対につきラームジー寺院の半分量になっていることである。これには調査村の農耕カーストにとっての両寺院の重要性の相違が反映している。重要性の相違は報酬の面のみならず、寺院所有地面積にもあらわれている。

マータージー寺院（ラーム神、シヴァ神はインド各地で崇拜されるヒンドゥの主神であるが、マータージーは地母神的性格の濃厚な女神で、主にグジャラート州で信仰されている）の運営は、シヴァ寺院の司祭がかけもっている。寺院の収入は、村民の寄贈した6ビガの寺院所有地からの地代と祭りの際の喜捨よりなっている。調査村でのマータージー信仰の主体は、低カーストのグループである。

以上の3カースト、大工、床屋、司祭はインド全土に広汎に分布し、しかも一般的に、現在でもジャジマニー関係を保っている。

これに対して、放牧カーストのジャジマニー関係は調査地域に独特のものなので、もう少し詳しく検討してみよう。

まず、種牛の維持獲得について。調査村では、放牧カーストが種牛を所持している。種牛獲得にはふたつの方法がある。第1は、放牧カースト成員が出資し合って、他村から種牛を購入する方法であり、第2は、自ら育てた種牛を他村の種牛と交換する方法である。後者の方法が好まれているが、常に可能だとは限らない。獲得した種牛には充分なる飼料が与えられねばならず、飼料を保障するために、農民との間に、種牛は立毛中の圃場に入ってよい、また農民は種牛が自発的にひきさがるまで決して追い払ってはならない、という不文律が成立している。

放牧費は成牛、成水牛（3歳以上）1頭につき穀物30kgが課される。子牛、子水牛の放牧費は徴集されない。子牛出産の際は、その都度5kgの穀物と1kgの粗糖がBharvadに渡されることになっているが、強制ではないので貧困な世帯は渡さないことが多い。

牛、水牛は朝8時頃、村の広場に集合する。輪番の放牧者は、雌牛、雌水牛を各々設定したコースに誘導する。雨期には青草の繁る共同放牧地、カリフ作、ラビ作の収穫後は、圃場で放牧する。放牧は夕方5時頃まで続けられる。

調査対象村落の内、5村の放牧権はBharvadが、1村はRabariが握っている。放牧権の内容と慣行については、両カースト間に相違はみられない。BharvadとRabariは、通常同村内に混住しない。

これまで、村落内分業体制を主にカースト・ヒンドゥ間の財とサービスの交換関係に注目して記述してきた。不可触民もこの分業関係に組み込まれ、農業労働や諸種の雑役・サービスを提供している。しかし彼らが享受できるカースト・ヒンドゥからのサービスは、限定されたものであ

一般化しているため、皮革業は専業として成立しておらず、農業労働が副次的所得源となっている。縄結いもすたれゆく業種である。現在では Vani 村の 3 世帯のみとなっており、これも近い将来、消滅するとおもわれる。報酬は簡易ベッドひとつにつき、現金ならば 5 ルピー、穀物の場合は 3～4 キログラムとなっている。

Bangi の伝統的職業は村内道路の清掃であり、Vani 村の清掃人は、年間 200～300 キログラムの穀物を受益者より受けとっている。報酬は 300～450 ルピーにしか相当せず、副次的な所得源に過ぎない。

以上の伝統的職業に共通するのは、被差別の刻印と報酬の低さである。かろうじて専業として成り立っているのは司祭職のみであり、他はいわゆる雑役としての性格を色濃くもっている。

調査対象村落のジャジマーニー関係 4 職種の内、不可触民は司祭（ヒンドゥ寺院）と床屋のサービスから排除されている。大工のサービスが受けられるのは、放牧の場合と同様に、浄・不浄観念に起因する規制が、農具相手であるために緩やかなためだとおもわれる。

以上、調査対象村落の伝統的職業およびジャジマーニー関係について具体的に論じてみた。最後に、これらの諸事例を、より大きな枠組のなかに位置づけておこう。

まず、伝統的職業およびジャジマーニー関係の存在形態と動向は、産業構造に集約的に表現される農工商間の相対的な発展格差、とりわけ農業労働人口に大きく規定されていることを確認しておきたい。換言すると、雑多な伝統的職業と数種のジャジマーニー関係職種の存続を現在なお可能にしている有力な根拠に、インドの全産業人口に占める農業労働人口の比率が 70.6%（1981年）<sup>16</sup>もの高率を維持していることがある。ちなみに、1901年の農業労働人口の比率は 71.7% である。ただし、農業労働人口を構成する耕作者と農業労働者の人口比率は、この間大きく変化している。耕作者の全産業人口に占める比率は、1901年の 50.6% から 1981年には 42.1% へと下落している。これは、耕作者を主要な雇客とするジャジマーニー関係職種の存立基盤を弱体化せずにはおかない。

産業構造の変動とその影響を踏まえた上で、今度は伝統的な職業とジャジマーニー関係の動向を規定している制度、経済、社会的な諸要因を個別に検討してみよう。

制度的要因で重要なのは、諸種の土地改革立法と教育の普及のふたつである。職人・サービスカーストは、土地所有とは決して無縁ではない。職掌に対して供与されるイナム地のほかに、余剰資金は優先的に土地購入に充てられた。他のカーストと同様に、職人・サービスカーストにとっても、土地は最も安全かつ実効ある投資対象であり、はやくも今世紀初頭には、農業に専従する若干の世帯が存在していた。さらに独立後、州政府の土地改革諸立法により、若干の世帯が新たに農地を獲得しているが、立法の施行が不徹底であったために、所有規模は零細である。土地への人口圧力の増加、それにとまなう地価上昇の趨勢のなかで、専業可能な農地面積の獲得は、ますます困難となっている。従って、伝統的職業からの乖離を促す要因としての土地所有のインパクトは、今後とも小さいといえよう。

教育制度の普及は、若年労働力を駆逐し、従来とは異なる労働力構成を強いると同時に、教育の

的整理と動向把握に優れ、示唆に富む。

Commander, S., *The Jajmani System in North India : An Examination of its Logic and Status across Two Centuries*, *Modern Asian Studies*, 17, 2(1983), Cambridge, 1983.

5 : 小谷汪之、『大地の子—インドの近代における抵抗と背理—』、東京大学出版会、1986年、96ページ。

6 : このパラグラフでの1901年と1981年の数値は、

Agrawal, A. N. (ed.), *India : Economic Information Year Book 1987-88*, New Delhi, 1987, p. 68. 内の第18表による。同表での1981年の数値は、5%のサンプル・データに基づくものである。

むすびにかえて

わずか数村という限定はあるものの、職人・サービスカーストの現時点での存在形態と動向について、主に社会・経済的な側面から検討してみた。

その結果、世帯を単位とすると、職人・サービスカーストの伝統的職業と実際の生業とのズレは概して大きいことが指摘できた。ただし、これには一定の留保を付しておかねばならない。それは、職人・サービスカーストのファミリー・サイクル (Family Cycle)、すなわち家族成員数の増加とその最終的な崩壊の諸局面のなかで、家族は経済的な上昇をめざし、自己のもつ生産的資源(労働力、土地、伝統的職業への権利)を最大限に活用しようとし、この過程で伝統的職業の恣意的・一時的な放棄が行なわれる点についてである。例えば調査村の Prajapati (陶工) のように、複数の兄弟が一村に存在する場合、一世帯のみが伝統的職業に就き、他は土地経営その他に特化するが、状況が変われば、他の兄弟も放棄したはずの伝統的職業を再度開始しうる。これは、ファミリー・サイクルに規定された、いわば内的な運動法則といってよい。

これに対して、伝統的職業への需要と報酬の変遷は、外的な影響要因といってよいだろう。

これまで、職人・サービスカーストの動向に関する議論は、外的な影響要因のみをとりあげる傾向にあったが、内的、外的要因の交点上に職人・サービスカーストを位置づけるのでなければ、急激な技術、経済、社会的変化にもかかわらず、存続しているジャジマーニー関係の存立基盤を正當に捉えることはできないであろう。

職人・サービスカーストの存在形態に関するより深い研究は、調査対象のサンプル数を増やすことよりも、出稼ぎ等を含めた家族の経済的上昇をめざす諸戦略を、詳細かつ的確に捉えることのうちにあるようにおもわれる。これは筆者自身がいずれ果さねばならぬ今後の課題である。